

歴史ある新素材「漆」

— 日常使いの芸術品へ

縄文遺跡に漆工品

ライター
しじょう
四條たか子

昭和34年、山梨県生まれ。歴史小説家のアシスタントなどを経てライターに。著書に『世界が愛した日本(1)(2)』(竹書房)ほか。



乾漆「響鳴」

北海道南茅部町(現函館市)の縄文遺跡から、約九千年も前の漆塗りの装飾品が発見されたのは二〇〇〇年八月のことである。それまで世界最古の漆工品とされてきた中国揚子江流域の河姆渡遺跡から見つかった約六千年前のものを上回った。

中国が原産といわれる「ウルシノキ」の樹液を用いる漆塗りの装飾技術は、中国で発達して日本に伝わったとされるが、そうした漆の中国伝来説さえ揺るがす日本漆芸史上の大発見だった。残念ながらこの装飾品は二〇〇二年の暮れ、埋蔵文化財調査団事務所の火災で焼失してしまったが、日本人と漆の

長いかかわりを示す貴重な発見であったことは確かである。

このように日本人は古来、各地に自生する漆の木を盛んに活用し、正倉院の宝物に代表されるような金銀螺鈿を用いた美術漆器の伝統技術に磨きをかけて一方、生活雑器としての漆器も広く普及した。江戸時代になると諸藩に護られた特色ある漆器産地が各地に生まれ、その地域性や制作者の個性が漆器の魅力の一面となっている。

新たな漆の活路

日本の漆芸品は海外でも高く評価され、「漆」や「漆器」が「Japan」と呼ばれたこともあった。多くの漆芸品を輸入した十七世紀の西欧には「黒」の塗料がなく、透明感とつやを備えた黒漆は彼らの目には、神秘的オリエントル世界そのものと映ったことだろう。しかし、数千年を超える日本人と漆のかかわりの中では決して長くはない、この数十年間でその関係は劇的に変わり、漆器のある暮らしが姿を消しつつ



乾漆「貝の環」



漆芸家・楠田直子氏の作品。楠田氏はイタリアで漆の魅力と出会い、大西長利氏に師事。奈良県に「乾漆工房・直」を構える(右・左下: Photo by Sayaka Otsuka)



ある。何十工程も要する伝統漆器は、高価で扱いが難しいというイメージが定着したからだ。生活雑器としては丈夫なのだが、電子レンジや食洗機で使えないことも漆器離れを加速させた。その結果、近年の漆産業は作家作品と実用漆器の二分化に加え、第三の用

途として工業分野への進出が模索されてきた。

その成功例の一つが会津塗で知られる福島県会津若松市のベンチャー企業(株)ユーアイツが特許を所得した「オリエンタルベキユア」だ。

ハイテクプラザ会津若松技術支援センターとの共同研究から生まれた含漆UV塗料で、速乾性に優れ、紫外線を当てると数秒で硬化する。伝統工法では温度・湿度管理が出来上がりを左右するが、その欠点を完全に克服したのである。

しかも漆本来の光沢や深み、高級感を損なうことなく塗装膜の強度を増し、コストダウンも実現して、現在は住宅の内装関連部材を中心に工業用材や電気製品へと用途を広げている。

漆工は グリーンケミストリー

漆は接着剤としても優れ、中尊寺金色堂や京都の金閣寺の修復では、金箔を貼るのに漆が用いられている。同じ

く会津若松市の(株)坂本乙造商店は漆の接着性に着目し、万年筆やアクセサリー、家電や釣竿など、従来は漆と無縁の製品への塗装で市場を開拓している。

中でも日本航空機のファーストクラスに採用されたシートは、FRP(繊維強化プラスチック)素材で形作られた本体に、漆芸技術と繊細な金属溶射技術(金属表面に溶かした金属やセラミック素材の微粒子を吹き付けて被膜を作る)を駆使して表面処理を施したものの。アメリカ連邦航空局が定める耐火性基準と美しさを兼ね備え、二〇〇五年に「第一回ものづくり日本大賞経済産業大臣賞」を受賞している。

一般の塗料には有機溶剤が使われるが、漆は酵素の働きで固まる自然素材として、グリーンケミストリー(環境に優しい化学)の分野でも注目されている。完全に乾燥した漆は耐水性、防腐蚀性、絶縁性に優れ、先端工業材としても魅力的な素材であるからだ。

私たちの周囲に、これまでとは違った形で漆が存在感を増す日は案外近いかもしれない。